

## No.15 白川 昌生 —無題—

Yoshio Shirakawa

北川フラムさんのコラム / 1998 (平成10) 年 5月 1日付 立川市市報記事より

白川昌生さんの作品は、「驚きと発見の街」というファーレ立川のコンセプトを典型的に表わしている作品です。

地下に入る車路の壁に、車路全体の平面図から車路の形を切り抜いた金属のレリーフを設置し、車路の横にある植栽に、切り抜かれた車路の形の金属板を立てました。ふたつはネガとポジの関係であり、全体のなかに部分があって、部分が全体を構成しているわけです。

それは知的なゲームのようで、都市の暗号を読み解く楽しさがあります。

白川さんは日本の近代美術を問い直す仕事を続けてきた作家ですが、この作品もまた、従来の「彫刻」という概念からはずれた、都市の仕掛けとして機能していると言えます。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現 : UR 都市機構) 「ミニ通信」より

「公共彫刻は必要か」

これまでの日本での公共彫刻とよばれるものの代表は、ヌードであった。そして今は、多様な表現ものへと移行している。しかしながら高度資本主義社会の中で、限りなく消費されるものとしての芸術は、公共彫刻という形態においても逃げられるものではなかった。

私は、いかにして消費システムから外れてゆける作品が作れるのか—そのために「彫刻」といった概念からズレた作品を制作することを決めた。

ファーレ立川の場所は、さまざまに作品が現れたり、隠されていたりすることのできる空間をもっており、私はこの空間性の特徴を生かすべきであると考え、駐車場の空間形態を作品へ、そして作品はさほど目立つこともなくひっそりと存在し続けることを考えた。そのため色彩もほどこさず亜鉛メッキのまま設置されている。毎日の生活の中で見かけられるこの作品が、人々の意識や視線の中で「彫刻作品」というものではなく、単に壁に取りつけられてある鉄板から、日常使用している駐車場空間の形態と同一であるという発見が行われる時、作品は作品それ自体ではなく作品を通過してひろがってゆく「生活」の場を見せてくれることになるだろう。

私は、自分の作品を「公共彫刻」という考えでは作らなかった。

しかし、これも「公共彫刻」という概念の外へ出ることはないと言えるだろうか。

近代的都市と消費生活の共犯関係の中から、のがれることができるだろうか。

疑問は、まだ続いている。